

新中国成立から文革発動までの孟浩然研究について — 『光明日報』掲載論文を中心に —

On studies of Meng Hao-ran during the time from the inception of the People's Republic of China to the beginning of the Cultural Revolution: A focus on articles reported in Guangming Ribao

川口喜治
Yoshiharu KAWAGUCHI

(1)

本稿は、1949年の新中国成立後、十年ほど経過した1959年3月から60年2月にかけて、『光明日報』紙上に掲載された孟浩然に関する論文4篇と66年6月に同紙に載った1篇に焦点をあてて、新中国成立から文化大革命発動までの間の新中国における孟浩然研究をたどろうとするものである。

周知の如く、中華人民共和国は社会主義・共産主義を国家統治のイデオロギーとして掲げたが、それは政治や経済のみならず、文化をも規定し、拘束するものとなった。文学芸術や学術研究もその例外ではなく、その指針となったのが毛沢東の「文芸講話」であった¹⁾。そこではじめに、本稿が中心的に扱う1959年から60年前後がどういった時代状況であったかを、文学芸術、学術研究を中心に簡単に確認しておく。

1956年4月に毛沢東によって百花斉放・百家争鳴が提起され、翌5月に最高國務会議でその方針が公開される²⁾。百花斉放・百家争鳴は「自由化政策のスローガン」で、「芸術の分野で異なった様式・内容の作品を自由に発表させ、学術の分野で異なった学説や理論を自由に発表・論争させる」ものであった³⁾。「学術研究や文学芸術活動において自由に意見を言っても、その人に咎はない」とされた。また「この提唱の背景には、これまでの胡風事件などのような思想批判運動で萎縮した知識人たちののびのびとさせて、社会主義建設に活用しようとする意図」が存在した。こういった中で、「ソ連から直輸入された「社会主義リアリズム」に対する、文学者の独自で独立した創作方法に対する探求」や「毛沢東の『文芸講話』にとらわれず、マルクス、エンゲルスやレーニンなどの原典から、各階級に共通する人間性（ヒューマニズム）を考察」することが行なわれたのである⁴⁾。

57年2月、毛沢東は「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」と題する講話を行ない、党外人士や知識人に積極的な党への批判を求めた。しかし党独裁などについて予想外の批判が続出したので、毛沢東は反撃を開始し、反右派闘争が翌58年前半まで展開されることになる⁵⁾。この闘争では、「独自の問題を提起したり、共産党に意見を言ったり注文をつけた人びとが、「右派」とされたり、はなはだしくは「反革命」として糾弾された⁶⁾。その結果、「共産党内でも自由な議論や研究ができなくなり、知的荒廃」がもたらされ、「中央の指導者でさえ、毛沢東の政策を公然と批判する状況ではなく」なり、「毛の専断と個人崇拜は助長され」て、「大躍進運動に道を開く」ことになった⁷⁾。また上述の「学術研究、文学芸術分野での百花が咲き誇る自由で独自の思考は、……毒草とされて葬り去られたのである」⁸⁾。「多くの人々は内心の声を正直に表明することを恐れて沈黙するか、上からの方針により景気よく迎合するかのどちらかになって」しまい、「大躍進運動のなかで、後者の傾向はいちだんと増幅されていった」⁹⁾。

57年5月、中共第8回党大会第2会議で大躍進を含む「社会主義の総路線」が全党の方針となり、

大躍進が始まる。人民公社の設立、大衆動員による鉄鋼・穀物生産の短期間の急激な増産など、急進的な理想社会の実現を目指すこの運動は、主観主義・命令主義で行なわれたため、経済に混乱を来した¹⁰⁰。加えて59年から61年には大自然災害が発生し、1500万人から4000万人の餓死者が出たといわれている¹⁰¹。大躍進が正式に停止されるのは、62年1月、毛沢東が部分的に自己批判した党中央拡大工作会議においてである¹⁰²。なお59年7月から8月にかけて行なわれた廬山会議において、大躍進政策を批判した国防相・彭徳懐らが「右翼日和見主義の反党グループ」として罷免され、反右傾闘争がはじまり、60年春まで続けられる。この闘争の重点批判の対象は党員幹部であり、彼らにとって、反右派闘争やのちの文化大革命とならぶ打撃であった¹⁰³。なお、上記62年の会議の主役となった劉少奇・鄧小平による経済の立て直しで、63年から65年には経済のバランスが回復したが¹⁰⁴、66年5月に毛沢東により文化大革命が発動される。

次に本稿で扱う論文が掲載された『光明日報』は「主に知識人を対象にし、科学・教育などに力を入れる総合的全国紙」である。「1949年6月中国民主同盟の機関紙として創刊され……53年1月各民主諸党派と中華全国工商業連合会の主管に変わった。しかし反右派闘争で総編集の儲安平が批判されて失脚、57年から党中央宣伝部と統一戦線工作部の指導下に入った。党の政治路線変動の影響を最も強く受けた日刊新聞の1つである。」なお儲安平の失脚は「百花齊放・百家争鳴運動の中で、……共産党の独裁傾向を“党の天下”と批判した」ことによるものであり¹⁰⁵、特に毛沢東の逆鱗に触れたとされる¹⁰⁶。

以上、先行研究の引用に始終しながら、概観してみた。文学芸術、学術研究に自由性・独自性が許されず、迎合主義、毛沢東個人崇拜が進む空気なか、ちょうど大躍進の時期に4編の論文、そして文革勃発時に1篇の論文が、党の政治路線変動の強い影響下にあった『光明日報』に掲載されたということになる。

(2)

さて次に、新中国成立から文革発動までの間に発表された孟浩然関連の論著を列挙する（台湾、香港のものは除く）。

- ①陳貽焮「談孟浩然的「隱逸」」（光明日報1954.8.22文学遺産17）
- ②林庚「談孟浩然《過故人莊》」（語文學習1957-2、1957.2）
- ③丁丕行「談唐詩“過故人莊”“燕歌行”“白雪歌送武判官歸”」（華東師範大学・語文教學1957-2、1957.2）
- ④李白風「孟浩然《過故人莊》淺積」（語文教學通訊（高中版）1957-2,3）未見
- ⑤紅小兵「王維孟浩然的作品應如何評價？華中師院中文系在教學中展開討論」（光明日報1959.3.20學術動態）
- ⑥路坎「有沒有選“春眠不覺曉”這首詩？」（光明日報1959.4.5文学遺産254）
- ⑦《文学遺産》編輯部「關於孟浩然及其《春曉》詩的爭論——來稿綜合報導」（光明日報1959.6.28文学遺産267）
- ⑧劉逸生「望洞庭湖贈張丞相（孟浩然）」（（広州）羊城晚報1959.12.20・唐詩小札(17)）
- ⑨文川「從《春曉》和《靜夜思》來談抒情短詩問題」（光明日報1960.2.28文学遺産302）
- ⑩劉開揚「論孟浩然和他的詩」（唐詩論文集（劉著、中華書局、1961.6）所収）
- ⑪王達津「孟浩然的生平和他的詩」（南開大學學報1964-2、1964.7）
- ⑫陳貽焮「孟浩然事跡考辨」（文史4、1965.6）
- ⑬經盛鴻「我對《春曉》一詩的新認識」（光明日報1966.6.5文学遺産554）

本稿が焦点とするのは、上記の⑤⑥⑦⑨⑬の論文である。その前に①②③論文の内容をごく簡単に紹介する。

①の陳氏の論文は、聞一多の論文「孟浩然」⁷⁷を批判的に継承することから出発する。聞氏が開元の盛世における孟浩然の隠逸が彼の郷里・襄陽にかつて隠棲した古人の影響を受けてなされたものであるとするのを、陳氏は主要、重要なことではないとした上で、『旧唐書』『新唐書』本伝、王士源「孟浩然集序」、孟浩然詩を資料としながら、40歳で長安にて科挙に落第する以前の隠逸とそれ以後の隠逸の性質が異なることを指摘する。前者が科挙合格を目指して学問や道徳的修養に励む楽観的なものであるのに対し、後者は世に出て活躍する抱負を持ちながらも「その主観的願望と客観的現実との矛盾に苦しみ、現実と官界の暗黒と醜悪を認識し明らかにし、世間に媚びない独立した人格の完成を願い求めた」ものであり、陶淵明に倣うものであったとする。この論文は、孟浩然の生涯を隠逸という言葉で均質的に捉える考え方に異議を唱えており、同氏の②論文と共に孟浩然研究の重要な論文であると言えよう。ただ孟浩然詩に徴して「現実と官界の暗黒と醜悪を認識し明らかにし」たとするのは唐突の憾みを免れない。新中国になって文芸に求められた現実主義（⑤で俎上に登る）を意識してのコメントと考えてよいであろう。同様に、科挙落第後の失意の作品が、賢徳の士を任用できない当時の政治の限界性を示しているという点で、「現実的意義」を持つとしている。また王士源の序によって40歳以前の学問や道徳的修養を説明する時、「軽微な労働への参加」を付け加えているのは、やはり文芸に求められた人民性（文芸作品が労働者・農民・兵士といった人民大衆の生活・思想・情感・願望を映し出しているという性質、と本稿では考えておく⁷⁸）に配慮したものであろう。王序に見える労働に関する記述は「灌蔬藝竹く野菜に水をやり竹を植える」⁷⁹の僅か四文字であることからしても、その配慮の特殊さが伺えよう。ちなみに労働について、孟浩然詩には、例えば「田家元日」「桑野就耕父、荷鋤随牧童く桑林と田野で百姓のおやじさんと一緒に野良仕事をし、鋤を担いで牧童のあとをついて行く）、「採樵作」「採樵入深山、山深樹重疊く薪を採りに深い山に入れば、山は奥深く木々が重なり合っている」⁸⁰など労働に従事したのを描く句が見られる。

次に②の林氏論文是北京・人民教育出版社刊の『語文学習』に掲載されたもので、孟浩然の代表作の一つである「過故人莊」詩について、頷聯の「緑樹村辺合、青山郭外斜く緑の樹木が村を取り囲み、青い山が襄陽の城の向こうに斜めに横たわる」⁸¹を中心に、その人間味や生活感の魅力を鑑賞した味わいのある論文である。なお論文最末尾の一段に、城郭の完全な古跡化、農村の空前の変化（合作社化・集団化を指そう）に関わらず、作品のイメージが「歴史の異なる段階を通り抜けて、依然として私たちに深いあこがれをもたらす」という、作品の感動の時代を超えた普遍性が指摘されているのには注意してよいであろう⁸²。

③は、孟浩然、高適、岑参の三作品を扱ったものである。「過故人莊」については、その田園風景と友情のすばらしさが鑑賞されている。なお文中には「詩人が農村の生活を熟知しておらず、農民の感情を体得できていなければ、このように鮮明に描くことはできない。」とある。孟浩然が農村・農民を理解していたという指摘は、①同様、文芸の人民性に配慮したコメントであろう。

さて、この頃の古典文学研究全般の動向がどうであったか明らかにはできていないが、少なくとも孟浩然研究については、人民性や現実的意義への配慮は見られるものの、その芸術性や文学性を正面から論じており、次節の『光明日報』掲載論文あるような現実主義、反現実主義、階級性、人民性などを焦点に据えた論調ではなかった。これは、①②に関しては、論文著者が共に北京大学の教員であることとあるいは関係しているかもしれない⁸³（③の著者丁氏については未詳）。なお次節で見る『光明日報』での論争直前、1959年2月出版の『唐詩研究論文集』（北京・人民文学出版社）に、①陳氏論文が再録されている。

(3) - 1

では『光明日報』掲載論文を追いかけてみる。なおこれらの論文への反論が本稿の目的ではないことを最初に断わっておく。

まず⑤の紅小兵という署名の「王維・孟浩然の作品をどのように評価すべきか？華中師院中文系が教学において討論を展開」（1959.3.20）についてである。紅小兵については未詳（文革期の小学生紅衛兵、紅小兵との言葉としての関係も未詳）。これは武漢の華中師範学院の中文系において、1959年の2月上旬から3月下旬にかけて「唐宋文学」の授業として行なわれた討論の報告であり、教員と2、3年生の学生あわせて500名余りが参加したものであった。テーマは、王維と孟浩然是現実主義の詩人であるか、それとも反現実主義の詩人であるのかというもので、結論として、両者を現実主義の詩人としていたこれまでの評価とは異なり、両者は反現実主義の詩人とされた。その主張部分を引用する。（なお引用文中の〈 〉内は川口による。以下同じ）

王孟が生きた時代の状況、二人の出身階級、政治的地位、二人の思想体系と作品の全般的な傾向などから分析すると、王維の「晩年唯好静、万事不関心〈吾が晩年はひたすら静けさを好み、全てのことに心がひかれない〉」（「酬張少府」）「世事浮雲何足問、不如高臥且加餐〈世の中のことは浮雲だから問題にするまでもない。そんなことより俗世に超然とし、しっかりと食事をする事だ〉」（「酌酒与裴迪」）「一生幾許傷心事、不向空門何処鎖〈この生涯、どれほ心を傷めたことであろう。仏門以外にどこでこの傷を消し去ることできょうか〉」（「嘆白髮」）、孟浩然の「祇応守寂寞、還掩故園扉〈ひたすら孤独を守り、やはり故郷の家の門をとざすことにしよう〉」（「留別王維」）²⁸は、すべて二人の地主階級としての孤独と寂寞、悠々自適の思想と感情を表現している。両者のいくつかの田園詩、例えば王維の「渭水田家」、孟浩然の「過故人莊」などは、すべて農村を美化し、階級矛盾を覆い隠しているのである。とりわけ王維の詩における「薄暮空潭曲、安禪制毒龍〈一人の僧がたそがれ時の人気のない潭で、座禪を組んで煩惱を抑えている〉」（「過香積寺」）、「一心在法要、願以無生契〈上人の心はひたすら仏法の要義にあります。無生の理を衆生にお勧め下さいますように〉」（「謁璿上人」）²⁹などは、さらに彼の仏教思想を大いにまき散らし、深刻な思想的毒素を含んでいる。……したがって王孟詩歌の全般的な傾向から考えれば、すべて現実を粉飾し、現実を歪曲しており、支配階級に完全にとけ込んでいるのである。二人は基本的に反現実主義詩人であると言わなければならない。

両者が現実主義詩人ではないと評価されたのは、その詩歌が「現実を粉飾し、現実を歪曲しており、支配階級に完全にとけ込んでいる」からである。「地主階級としての孤独と寂寞、悠々自適の思想と感情を表現」するのは地主階級の現実を描いたという意味で現実主義と捉えてもよいはずであるが、ここでいう現実主義が社会主義リアリズムのことである以上そうはならず、描くべき現実には農民の苦しい労働や地主による搾取といったものであり、それらを隠蔽・粉飾・歪曲していることから反現実主義と評価されたのである。また②林氏や③丁氏によってその魅力が解読された「過故人莊」も「農村を美化し、階級矛盾を覆い隠している」の一言で片付けられてしまっている。なおこのあと記事では、上の論調に反対的な立場の意見、すなわち、孟浩然の詩作に民族矛盾・階級矛盾が描かれておらず、また杜甫のような現実主義の叙事詩つまり社会詩・人民詩がないのは、その生涯が「開元の盛世」つまり社会矛盾が表面化していない時期にあったからであるという主旨の反論の存在（歴史上の人物を当地当時の基準で評価すべきであるという、この時期の歴史学に見られた実事求是の姿勢³⁰と関連していよう）、王維の「山水詩」は階級を超えたつまり全ての階級に共有される美的意義を有するのではという課題の存在を報告している。しかしそれらは、記事末尾にある、討論が「『百花齊放、百家争鳴』の精神を十分に發揮した」ことを示すための弁明である印象が強い。

(3) - 2

⑤での批判的評価の対象は主に王維あり、孟浩然是副次的な扱いになっていた。⑥の路坎「『春眠不覚曉』詩は選ばれたのか？」（1959.4.5）では、孟浩然について、その代表作「春眠」『春眠不覚曉、処処聞啼鳥。夜來風雨声、花落知多少。』³¹を焦点に論じられる。路坎については、ペンネームである

うが、未詳。この論文は、『新編唐詩三百首』に孟浩然の「春暁」が選ばれなかったという、路氏の同郷の人物の嘆きで始まる。『新編唐詩三百首』は鄧拓編、1958年12月、中華書局出版、孟浩然詩は一切採られていない。その序文には次のようにある。「旧選集〈清・蘅塘退士撰『唐詩三百首』〉の三百十首の唐詩の中で、その半数以上が、政治的には封建的支配を擁護し、思想的には現実逃避を提唱し、芸術的には韻律と形式を重視した作品である。」「旧選集の悪影響を取り除くために、新しい選集がそれに代わらなければならない。」「〈新選集編集の〉目的は、選定された詩が今日の人民に奉仕することにある。」「〈選定には〉政治的基準を第一とし、芸術的基準をそれに従わせ、政治的基準に統合する。」なお政治的基準としては「労働人民を代表する詩歌」「封建地主・貴族の支配階級を代表する詩歌」「人民性」「進歩性」「革命性」「妥協性」「落後性」「反動性」といったことが挙げられている。また文学芸術活動において政治的基準を第一にし、芸術的基準を第二することは、周知の通り1942年5月の毛沢東の「文芸講話」に述べられたことである。

さて路氏の論文は、まず孟浩然を次のように位置づける。

中国文学史上に確かに次のような人たちがいたのは周知のことである。自らは労働に参加しない、あるいは少しだけしか参加せず（当然労働人民とはいえない）、労働人民に対して共感することは多くはないが、人民の利益にならないことも何ひとつしたことがない。彼らは主な精力をひたすら田園を描いたり山水を詠ったりすることに注ぎ、流派を作った。彼らのこのような作品は「山水詩」と呼ばれている（私たちの文学史において、山水詩の中のすばらしい作品は私たちの文学遺産の一部である）。例えばこの『春暁』と題された詩の作者・孟浩然是、この流派の詩人の中に数えることができると思われる。

⑤論文や『新編唐詩三百首』で階級性や人民性が古典詩評価の最重要基準とされたことを否定はしないが、「人民の利益にならないことも何ひとつしたことがない」と見ることで孟浩然の復権を目論んでいる。ただ①陳氏が人民性を意識して指摘したと考えられる「軽微な労働への参加」は、「当然労働人民とはいえない」として厳しく切り捨てられてしまっている。そして次のように続ける。

〈科挙落第によって〉自分が埋没させられたという不満……の感情に孤高さが加わった結果、彼は旧社会とそぐわなくなったのである。歴史上、支配階級と協調しないという態度には、かなり断固としたものもあつたり（陶淵明のように）、それほど積極的でない態度もあつたりしたが、孟浩然の場合は後者にあたる。孟浩然がこのような人物であるからこそ、この『春暁』のような詩を作ったのである。そこに描かれたのは自然風景ではあるけれども、その風景は詩人が愛好するものを自己の感情をフィルターとして描いたのであるから、結局、詩は写真〈ありのままの姿〉とは別物なのである。この詩は一見、花鳥を描いているが、その実、突き詰めて言えば、孟浩然の孤高さや現実に対する不満の感情とつながりがあるのだ。当時の政治支配に不満を持っていながらも、それに反抗できない場合に、山水花鳥を詠ずることに向かうのは、封建社会の一部の知識人の思考パターンに合っているのだ。

「支配階級」は皇帝をとりまき中央政界で実権を握る人たちを指しており⁸⁹、孟浩然の「春暁」は、支配階級に協調しない態度、政治支配に不満を持ちながらも反抗できない態度のおだやかな表現であると捉え、その現実的意義を見出している。⑤のように孟を反現実主義詩人とする事への反論の意図があろうが、強引な印象を与えよう。この考え方を基に、次のように述べる。

封建社会の知識人が孤高であり、あるいは山水の間に心を解き放すのは一種の政治的態度といつてよいであろうか。答えは当然その通りだ。これは表情がわからないようにメイクアップされた一種の政治的態度であり、この種の政治的態度の特徴は見かけが政治とは無関係のようになく表現されていることであり、その政治性はまさしく政治から「脱離〈関係を断つ〉」することなのである。このような態度は、封建社会においては幾分か進歩的な意義を持つこともあり、そのすべてを否定することはできないと思われる。というのは、この態度は旧社会に対して何ら変革作用をもたら

さなかつたけれども、やはりどう考えても悪人とぐるになって悪事を働くよりはすばらしいからである。たぶんこの点も人民が孟浩然になお好感を持ち続けている理由であろう。

山水を詠う詩人の態度は、見かけ上政治とは無関係のように巧みに表現されている政治的態度であるとして、政治からの「離脱」に政治性を見出し、それが「封建社会においては、幾分かは進歩的な意義を持つこともある」として完全否定できないと主張する。しかし考え方によっては政治からの離脱を反政治性とすることもできる。また「進歩的な意義」について、ここではそれが「悪人（支配階級）」と一緒に悪事を働かなかつたことを指していると言めるが、それを進歩的と言えるのか疑義が残ろう。この部分も、やはり論述に無理な印象を免れない。繰り返すと、路氏はここで、孟浩然が「旧社会に対して何ら変革作用をもたらさなかつた」ことを認めつつ、支配階級と共に悪事を働かなかつた点を肯定すべきだと主張している。あわせて孟浩然が人民に支持され続けてきたことさりげなく指摘している。また上記引用部分に続いて、「木匠（指物師）出身の人民芸術家として毛沢東に氣に入られ」た齊白石（1864-1957）²⁹の絵画をとりあげ、彼の芸術が人々に支持されるのは政治問題を表現した面だけではなく、自然美を表現した面でもあることを指摘し、さらに齊白石が政治問題を表現することに制約があり、人々もそれを理解していたので彼に政治問題の表現について多くを要求しなかつたと指摘する。そしてこのことを、作品はその題材に応じてその内容が求められるべきであるという問題に結びつけ、山水詩・花鳥詩に叙事詩（論では杜甫の社会詩・人民詩のような作品を指していると考えられる）のような内容を求めることへの疑義を呈している。つまり路氏は、齊白石に対して政治面での制約を容認し且つその自然画を評価するのに、どうして孟浩然が「春暁」や山水詩の政治性の希薄さを理由に批判されなければならないのかと訴えているのである。そして結論として、

これはやはり読むに値する詩であり、二十の文字が生氣にあふれた春の朝の光景を描き出している。朝に鳥が鳴いており、昨夜の風雨の騒がしさが思い出され、さらに花が散ったのを想像している。その描写は精彩を放ち、想像の余地がかなり多く残され、作品のよさを見出すことを読者自身にゆだねるのである。……ただ私たちにとって「隠士」の作品ではあるけれども、私たちを連れて人間社会を離れようとすることは決してない。

まとめると、孟浩然を如何に高く持ち上げようともそれは自ずと間違いであるが、抹殺（原文も「抹殺」。完全に否定する）する必要もないと私は考える。……私たちの生活はたいへん幅広い、人々の趣味も多方面にわたる。山水詩の鑑賞を私たちの生活の一コマにしたとしても、何かよくなることがあるだろうか。

と述べる。なお上の「春暁」解釈は今日的には極めて常識的なものであろう。

本論文には、文芸の現実的意義や政治性を強く意識しつつ、孟浩然と「春暁」を「抹殺」させまいとする苦慮や多様な価値の希求が示されている。さらには②林氏論文に見られたような作品の感動の普遍性についての控えめな主張を読み取ることができるだろう。このような態度は、当時の学者、知識人の抱える苦悩を示しているのではなからうか。

(3) - 3

⑦「孟浩然と『春暁』詩に関する論争 — 投稿総合記事」（1959.6.28）は、⑥路氏論文に対する6篇の批判投稿を文学遺産編輯部がまとめたものであり、「これらの文章の結論はほぼ一致しており、それは、この『春暁』という詩は今日の読者にとって吸収に値する有益なものは何もなく、この詩が『新編唐詩三百首』に採られなかつたのは全く正しい。」と冒頭に述べる。次に編輯部は批判の論点を三つに要約している。

まず「一、文学作品には中間性作品はあるのか」と題する反論である。「中間性作品」（或いは「中間作品」とは「〔人民的な進歩的文学と反人民的な反動的文学ほかに〕反動的でもなく、また何ら人民性ももたない中間作品が存在している」と定義されるものである³⁰。ここではまず、中間作品の存

在を否定して次のように述べる。

政治において中間的立場がないのと同様に、文学作品においても中間性の作品はない。何故なら階級社会においては人は階級に属するため、いかなる作家の作品もすべてその作家が属する階級の意識や感情の現われだからだ。階級を超えた人が存在しえないのと同様に、階級を超えたいかなる文学作品も存在しえないのである。

これに基づき、「封建文人について言えば、出仕するか、退隱するか、支配階級に向かって闘争を繰り広げるかであり、階級の烙印を押されていないものはない」とする。そして路氏の説く「自らは労働に参加しない、あるいは少しだけしか参加せず（当然労働人民とはいえない）、労働人民に対して共感することは多くはないが、人民の利益にならないことも何ひとつしたことがない」人物を「孤高をもって自任する中間派」とであると解釈し、そのような中間派の存在を否定する。しかしここには次の点で論理の飛躍がある。まず中間作品は反動性・人民性を観点に定義されているのであり、階級性とは切り離されている。換言すれば作者の所属階級に関わらず中間作品は存在するということが定義の意味である⁸⁹。ましてや路氏は中間作品について一切言及していないのである。また路氏は孟浩然を「封建社会の文人」とするだけで、「支配階級」とはしていないが、中間派ともしてはいないのである。ここでは中間作品の概念を援用し、いささか強引に路氏を批判しているといえる。そして

孟浩然是退隱したが、悪人とぐるになって悪事を働く、つまり支配階級と協力することを望まなかったわけでは決してない。実際は協力が実現しなかったので退隱せざるを得なかっただけなのである。

として、路氏が「政治から「脱離」する」ことを「政治的態度」とし、そこに「幾分かは進歩性を持つ」とすることに反対する。この反論にはそれなりに説得力がある。また既述のように路氏の論述に無理があったため、簡単に反論されたと見られる。いずれにせよ、この反論では肝腎の「春暁」に全く触れられていない。

次に「二、どのように古代の作家、作品を評論するのか」では、「古代の作家、作品の価値や是非について判断するには、その作家の人民に臨む態度がどうであるかという唯一の基準に必ず依拠しなければならない」とした上で、

孟浩然の山水に心を解き放つ描写は、孟浩然個人の気持ちのなにかの流露でもあるのだが、その思想性について言えば、肯定に値する進歩的な意義はいくらもない。とりわけ『春暁』詩は、私たちの分析批判の反面教材にしかかなりえない。

と厳しく批判する。また「『春暁』の意図は惜春」とし、「『処処聞啼鳥』がかなり生き生きと春の活気に満ちた様子を描き出している」と唯一評価するものの、全体として「春が去り花が散る描写を通じて作者の落ちぶれて頹廢した気持ちを言葉に表わしたのである。……有閑階級のものぐさで、のんびりと消極的で、退屈な精神の有り様を表わしているのである。」とする。

ついで「山水花鳥詩が美の味わいを与えるかどうかという問題については、投稿中の意見は全般的にそれに肯定的であった」としながらも、作品評価は政治的基準を第一に、芸術的基準を第二にするという「文芸講話」の基準を示したあと次のよう論ずる。路氏が挙げた齊白石との比較において、齊の絵画が「花鳥虫魚は生き生きと真に迫っており、没落階級の退屈な気分はない。……その絵を見れば、命の美しさ、生活の豊かさと多彩さを感じ取ることができ、それによって人々は刺激され、生活をこよなく愛し、人生を心から愛し、人生に対して積極的な態度を取るようになるのである。」のに対し、孟浩然の「春暁」を読んでも「『私たちを連れて人間社会を離れようとする』ことは必ずしもないとはいえ、おそらく私たちが更に多くの社会の現実に関心を寄せるようにはならず、だらけてのんびりした生活に浸り、意気消沈して元気が出ない精神状態に陥ることになる」とする。路氏は作家における作品の題材とその内容の問題として、齊白石を援用したのであるが、ここでそのことはほぼ無視され、人民の生活に対する作品の効用に論点に移され批判されている。

最後に「三、作品の社会的影響に関するの問題」は、李白が「贈孟浩然」詩³²で孟浩然を称えたとする路氏の指摘に対する反論であるが、紙幅の関係もあり省略する。むしろ上記の3点以外の反論として引かれた次の意見を引いておくのが本稿の主旨に合う。

現在の大躍進の時代において、社会主義の思潮はすべての人々を激しく揺り動かしており、隠士の作品を少しばかり読んだことで、たとえ甚だしい悪影響を産み出さずとも、時代精神と相反する作品を読むことがひとりの人間〈路坎を指してしよう〉の進歩を阻みうるのだという事実を等閑視することはできない。古典文学作品の選集を出版する事業では、その主要な任務は〈古典文学作品の〉普及にある。この種の選集は工農商学の青年の知識人の読書に提供されるものである。青年の知識人の特徴は、性格が固まっておらず、批判能力がかなり足りず、よからぬ影響を受けやすいということである。もし少しでも注意を怠ると、間違った意見や学説が流布し、その害は少なくないのである。

本論文が発表された1959年6月には破綻を来たしはじめていた大躍進政策ではあるが、その号令の下に「文学遺産」とそれを守ろうとする人物が「抹殺」されんとする「思潮」を感じ取ることができよう。

(3) - 4

⑥の路氏論文の完全否定にも近い⑦が掲載されたあと、⑨文川『「春暁」と『静夜思』から抒情短詩の問題について論じる』(1960.2.28)が発表される。文川氏については未詳。この論文は、⑦に対して穏やかに反論し、李白「静夜思」「床前看月光、疑是地上霜。挙頭望山月、低頭思故郷。」³³との共通点を探りながら、慎重に「春暁」の肯定的評価を試みている。また冒頭に「我が国の古典抒情詩歌の芸術的特徴は何であるのか。これは興味溢れる問題である。」とあるように、「文芸講話」が作品評価の第二基準とした芸術的基準を論点にしていることも注目される。論文は、「春暁」についての今日的に常識的な鑑賞を述べたあと、次のように続く。

あきらかに詩人にはここで落花を傷み行く春を惜しむなにかしかの気持ちがあるのだけれども、全体的に見れば一首はやはり主として生き生きとして活発な春の息吹に対する興味に満ちあふれている。基調はやはり比較的軽快で清新であり、のちの才子佳人が春を傷み秋を悲しむ退廃的でつまらない態度とは明らかに異なるところがあり、それは人民にとって基本的に無害である。さらにそこに極めて洗練されて巧みな芸術的技法が施されたために人々に人気があるのである。

しかしながら、詩の情趣は結局のところは主にやはり有閑階級のものであることも指摘しておかなければならない。当時の労働人民は「春眠不覚暁」ではありえない上に、「花落知多少」を心配するようなのんびりとした気ままな気持は持たなかった。それ故、この詩の思想的価値について論ずるならば、高い評価をしすぎるのもよくない。この詩が孟浩然の孤高と現実に対する不満を表現していると説く人〈路坎〉もいるが、この種の拡大解釈にはかなり無理があると考えられる。たゞもしこの詩が完全に消極的で意気消沈したものであるならば、私たちには極めて有害であり、徹底的に否定しなければならないが、それはそれでいささか行き過ぎの嫌いがある。

「人民にとって基本的に無害である」とし、「極めて洗練されて巧みな芸術的技法が施されたために人々に人気があり愛唱されてきたことの指摘によって、その存在を保証する一方、「詩の情趣」が労働人民には経験できない「有閑階級」のものであるとの指摘を忘れていない。また「孟浩然の孤高と現実に対する不満を表現している」とする路氏の解釈を拡大解釈として却けるのは、⑦が「意図は惜春にある」としてその現実的意義、政治性を否定するのを承けてのことであろう。孟浩然と「春暁」を守ろうとする立場は、文氏と路氏とでは同じであるが、文氏は、路氏が政治性をいささか強引に説いたことによって批判されたために、政治性ではなく、作品の芸術性に焦点をあてて論じざるをえなかったのではと考えられる。

李白の「静夜思」については、その読解のあと、次のように述べる。

このような仰向き俯いて嘆き悲しむ心情には、やはり当然、士大夫〈伝統的知識人〉階層の烙印が押されている。しかし『春暁』と比べると、人民大衆とかなり多くの共通点がある。というのは、封建の動乱の時代にあつては、あまたの人々が流浪し落ち着く場所を失い、故郷を遠く懐かしむという悲哀はまさしく人民の苦難の一つでもあったからだ。それ故このような感情は、当時にあつては人々の同情と共感をたいそう引き起こすことができたのである。このことがこの詩がかねてより人々に特別に愛好されている最大の秘密であると思っている。

詩歌の情感が「士大夫階層」のものであるという階級性を指摘しながらも、そこに人民大衆との共通点を見出し、それゆえ人々に愛好されてきたことを指摘する。また人民の感情との共通性においては「静夜思」を「春暁」以上に評価しているが、それは同時に、その共通性が「春暁」に幾分なりとも認められることを暗に指摘しているのではなからうか。まとめの部分では、

この二首の詩に共通する芸術上の特徴の一つ見いだすことができる。それはある自然景物とその変化に対する詩人の深い感銘を鋭敏に捉えるのに優れており、イメージを洗練する芸術的構想を通じてそれを深く生き生きと伝えることができているということである。このような芸術的特徴は、我が国のあまたの優れた古典抒情短詩と風景詩の中ではかなり普遍的に存在しているのである。

とし、あくまで論点を芸術性に置き、その特徴が古典抒情詩では普遍的であると指摘する。この指摘は、政治的基準から古典文学を否定する考え方に対する穏やかな抗議と見て取れる。続けて、

思想的内容からすれば、詩人のこのような生活体験が、その大きさに関わらず人民の感情という海洋に通じてゆけるならば、意義がある。……これは抒情詩の価値を決定する根本的な条件である。ちっちゃな抒情詩と風景詩に論ずべき思想性がないと考える人もいるが、それはまさしくその芸術性を孤立的、一面的に分析したものであつて、誤りであり、有害であると私は考える。

と述べ、⑦が否定した思想的意義を見出している。また「孤立的、一面的」は、⑦の「作家の人民に臨む態度がどうであるかという唯一の基準」を特に指して批判しているものと考えられる。

論文最後には、短い抒情詩や風景詩であっても、全て階級性を有するとした上で、前述の「反動的でもなく、また何ら人民性ももたない中間作品」の存在を認め、そこに「春暁」「静夜思」の存在価値を見出している⁹⁴。『光明日報』紙上の論争においては、政治的基準を第一として文学作品が評価される状況下、孟浩然の文学、少なくとも「春暁」は、その芸術性が如何にすぐれようとも、「中間性」という脆い線上にしか存在できなくなってしまうようである。

なお、⑥路氏論文とこの文氏論文では、孟浩然と「春暁」が従来より人々に支持、愛好されてきたことが指摘されているが、両論文は慎重にそれを「人民性」ということばで表現してはいない。しかしそこには、孟浩然自身が労働人民ではなくとも、人々に支持、愛好されること自体がその人物・作品の人民性を示すのだという思考が読み取れるのではなからうか。

(4)

さて第3節に紹介した論争とは違ったところでも、孟浩然が論じられていた。1959年12月20日に⑧劉逸生「望洞庭湖贈張丞相（孟浩然）」が広州の『羊城晚報』の「唐詩小札」欄に掲載される。また⑩の劉開揚「論孟浩然和他的詩」を収録した劉氏『唐詩論文集』（上海・中華書局）が1961年6月に発刊される⁹⁵。少し後の1964年7月、天津の『南開大学学報』1964-2に⑪王達津「孟浩然的生平和他的詩」が掲載される⁹⁶。

まず⑧の劉氏は、57年10月『羊城晚報』創刊時の第二副刊部主任で、59年から同紙に「唐詩小札」を掲載した⁹⁷。論では「望洞庭湖」詩⁹⁸について「干謁詩」と位置づけた上で、前半四句の雄大な自然描写と後半四句の仕官への願望を平易に解説する。論は干謁詩の理解が「私たちの唐詩理解に対して、やはり役割がないことはない。」と締めくくられるが、これは唐詩理解を前提、つまり唐詩の存在、

そして孟浩然詩の存在を容認することを前提としており、『光明日報』の論争の論調とは大きく異なる。なお論の末尾では「この詩には、おのずと、どのような思想性があるかはっきりとは言えない」と文芸に求められた「思想性」を意識してのコメントを付加している。また1962年4月出版の劉著『唐詩小札増訂本』（広東人民出版社）所収のものでは右の「どのような思想性」が「どれくらい取るべきところ」と多少曖昧に書き換えられているが、これは文芸の人民（詩の読者）に対する効用性を意識してのコメントであろう⁹⁸。

次に⑩劉氏の論文を簡単に紹介する。劉氏は当時、四川財經学院、成都大学で教鞭を執っていた⁹⁹。孟浩然を高雅な隠士、隠逸詩人とする見方を彼の詩文に徴して論駁し、彼が強く出仕を求めていることを指摘する。また科举落第後の作品について「封建的暗黒政治に反対する、中国の詩人の優れた伝統が孟浩然にも影響を与えている」とその政治性を指摘しているが、この指摘は第2節①陳氏論文と同様、唐突の憾みが強い。また歴代の批評を概観したあと、それらに孟浩然詩は思想内容が豊かではないという最大の欠点の指摘が見られないと述べる。その一方で孟の田園自然詩や離別詩が優れているとする。「春暁」については、詩人の自然への深い愛を表現したものであり、「無思想性の美」「頹廢主義」との評価（『光明日報』の論争を意識しよう）を却けている。労働にも言及し、作品に徴し、地主階級として補助的な農村の労働をしたことを指摘する。但し、その「思想や生活態度が人民の生活に近づくことを妨げたことによって、高適や岑参のように人民性を備えたより多くの詩を描けなかった」と併せ指摘している。全体としては、田園自然詩という孟浩然の本領を評価するために、政治性、人民性、思想性にかなり配慮しているという印象が強い論文である。

⑪の王氏論文は初出のものを目撃できていない。1986年2月出版の王著『唐詩叢考』（上海古籍出版社）所収のものを見る限りでは、伝記考証と作品を論ずる部分に分かれる。後者ではまず、孟が常に濟世の志を抱いていたという視点から、その田園山水詩や送別詩を中心に分析し、労働にもいささか言及する。また孟浩然が山水を詠ずることは世事に対する消極性の現われであるとの批判をしつつも、そこには「政治を決して忘れず、世に出て世を救う思いが随所に現われている」など指摘し、その点で王維の山水詩よりも優れると評価する。随所でこのような文芸評価の政治的基準からの論述が見られる。次いで、芸術的視点から孟の文学史上での位置づけを試みており、これに比較的多くの紙幅をさいているのが特徴である。全体として孟に高い評価を与えつつ、「幅広い現実の暗黒と人民の辛苦に向かい合っていない」、「小莊園主の生活の立場と思想・感情」などの点からの批判を忘れていない。なお論文中に「春暁」への言及はない。

以上3篇の論文を見るに、総じて、政治的基準にかなり配慮しつつも、その文学を芸術性や文学性に焦点を据えて論じることが、『光明日報』と違った場では可能であったようである。

(5)

以上をまとめると、1959年から60年の『光明日報』紙上での論争は、政治的基準を孟浩然評価の第一基準としてその存在価値を否定する論調に対して、何とか存在価値を見出そうとする努力のせめぎ合いであった。『光明日報』以外の場合では、政治的基準に対する配慮のもと、芸術性や文学性に焦点を据えて論ずる試みがなされていた。次いで文革発動約一年前に、⑫陳氏の伝記考証が発表される（伝記考証は政治的基準にさほど配慮を必要としない研究であろう）。そして、1966年6月5日に⑬経盛鴻氏の「『春暁』という詩に対する私の新たな理解」が『光明日報』に発表される。発表されたのは正に文革が発動された時期であり、『光明日報』は経氏論文発表二日前の6月3日より第一面最上段の紙名横に「毛主席語録」を掲載するようになる。経氏は記事末尾に南京大學学生とある。さて本記事は、論文と言うよりは手記に近い。「私たちを教え導き、無産階級の高い思想的次元に立って、過去の一切の文学遺産に対して分析を行い批判するよう求めた」党に対して、

私はこの小さな詩、よき詩は批判できない気がしていた。何を批判するというのか。この詩はわず

か二十字であり、まさかここにも何らかの封建的な毒素があるというのだろうか。学术界において山水詩、花鳥詩は階級性を持たないと主張する人は、この詩を例とする。私もそれを十分に信じていた。労働人民も美しい大自然を好んだのであり、孟浩然のこの「純風景詩」も彼らに愛好されていたはずであると私は思っていた。このような思想に支配されて、春の朝、朦朧としたねむけをいだいたまま目が覚めた時はいつもこの「千古の名句」をおもわず口ずさんでいた。

であった経氏が「江蘇省溧陽県にある果樹園」に下放され、

毎日、果樹園の労働者や貧農下層中農とともに労働し、ともに生活し、ともに毛主席の著作を学習した。新しい環境、新しい生活によって私たちの思想認識にもいささか変化が生じた。私たちはもう誰も「春眠不覚曉」というような詩をうたえなくなっていた。

というまでの経緯をこの論文は述べる。その論点は次の二点である。「第一に、この詩が映し出す「春眠不覚曉」というような生活は、労働人民には可能であるのだろうか。不可能である。一日中たらふく食い、何もしようとしないう搾取階級にしてはじめて可能なのである。」「第二に、この詩が映し出す思想と感情、情趣や風流も、搾取階級の知識人であってはじめて持つことができるのである。労働人民の中で誰がきつくて忙しい春の朝に鳥の鳴く声に耳を傾けていられようか。更に誰が夜のあらしのあとに「花落知多少」などと問えようか。」そして『「春曉」』という詩は、わずか四句、二十字しかないけれども、完全に封建文人の生活と思想、感情を映し出したものである。この詩は階級性を持たないのではなく、強烈な地主階級の感情に満ちあふれているのである。」と結論づける。孟浩然の「春曉」に詠われる経験や感情が労働人民には不可能であるという論点は、この詩の存在価値を守ろうとした⑨文氏論文にも見られたが、ここではその論点が全てを覆っている。このような「春曉」理解について、筆者自身、文中で「他の人にとってこのような考え方はきわめて浅薄であるかもしれない」と述べてはいるが、もはや孟浩然「春曉」が筆者自身を含めた人々に愛唱されてきた事実とその意味、作品の芸術性などは等閑視されてしまっている。

また文中には「春曉」に対置されるものとして、人民公社社員の春の朝の歌声として次の歌が引かれる。

公社春来早、地勤人更早。東方還未亮、人已下地了。〈人民公社の春は早い。大地で働く人はもっと早い。東の空が白まないうちに、もう野良仕事。〉

続いて論は、

思い起こすに、私の過去の学習生活が実践から離れ、労働から離れ、労働人民から離れていたからに違いない。私の生活において私の思想と感情が孟浩然と相通ずるところがあったために、彼の詩に対してとりわけ共感を起こしやすかったのである。

との自己批判のあと、

ひとりの青年学生が、古典文学を本当に学んで身に付け、批判識別能力を持つことができるためには、実際の闘争の中に入り、労働者・農民大衆の中に入り、自己を鍛錬し、自己を改造し、自己を向上させなければならないのである。

という言葉で締めくくられる。

*

私の調査では、こののち新中国において孟浩然研究論著は1978年まで存在しない⁴⁰⁾。経氏の論における孟浩然の代表作「春曉」の否定は、同時に孟浩然とその文学すべての否定を意味するものであったことになる。ここに見られた極北の解釈学は孟浩然研究の甲鐘のように響く。ちなみに孟詩を一切採録しなかった前掲『新編唐詩三百首』の編者としてその名が記されていた鄧拓は、経氏論文発表の半月前の5月18日に毛沢東による三家村批判キャンペーンにさらされ自殺している⁴¹⁾。

以上『光明日報』掲載論文に焦点をあて、新中国成立以後文革発動までの孟浩然研究を一瞥してみた。

〔注〕

- (1) 『原典中国現代史』第5巻第I章第1節『「文芸講話」の方向へ』（吉田富夫執筆、岩波書店、1994年）に「文芸講話」が「たんに文学・芸術にとどまらず、ひろく知的領域の活動の進路をも方向づけるものであった。」とある。
- (2) 注(1)第1巻第II章「社会主義中国の出発から百花斉放・百家争鳴へ」（毛里和子執筆、岩波書店、1994年）
- (3) 天児慧ほか『岩波現代中国事典』（1999年）「百花斉放・百家争鳴」（安藤正士執筆）。以下この書籍からの引用は、原文の「,」「.」を「,」「。」とする。
- (4) 注(1)第III章「百家争鳴から反右派闘争へ」解説（萩野脩二執筆）
- (5) 天児慧『中華人民共和国史』（岩波書店、1999年）。
- (6) 注(4)に同じ。
- (7) 注(3)「反右派闘争」（安藤正士執筆）
- (8) 注(4)に同じ。
- (9) 小島晋治ほか『中国近現代史』（岩波書店、1986年）
- (10) 注(3)「大躍進」（安藤正士執筆）、注(2)第III章「毛沢東型社会主義の形成」（毛里和子執筆）
- (11) 注(5)に同じ。
- (12) 注(3)「大躍進」（安藤正士執筆）
- (13) 注(3)「反右傾闘争」（安藤正士執筆）、注(10)。
- (14) 注(5)に同じ。
- (15) 注(3)「光明日報」「儲安平」（三好崇一執筆）
- (16) 注(2)に同じ。
- (17) 「唐詩雑論」（『聞一多全集』第3巻、開明書店、1948）所収。
- (18) 『現代漢語詞典修訂本』（商務印書館、1996年）「指文芸作品中対人民大衆の生活、思想、情感、願望等的反映。」に基づく。
- (19) 徐鵬『孟浩然集校注』（人民文学出版社、1989年）p.1。徐氏の校記よればこの部分を「灌園藝圃」に作る版本もある。
- (20) 注(19) p.65・77。『校注』本文が、「田家元日」の引用一句目を「野老就耕去」に作り、「採樵作」の二句目の「樹」を「水」に作るのを、共に校記によって改めた。
- (21) 注(19) p.261。「故人具鶏黍、邀我至田家。緑樹村辺合、青山郭外斜。開筵面場圃、把酒話桑麻。待到重陽日、還來就菊花。」
- (22) 林著『唐詩綜論』（人民文学出版社、1987年）に再録されたものには、この末尾の一段が省略されている。
- (23) 林氏は1952年より北京大学教授。陳氏は林氏の門下生で北大教員。『中国文学家辞典現代第1分冊』（四川人民出版社、1979年）、陳氏『論詩雜著』「附在後面——聊代自伝」（北京大学出版社、1989年）による。
- (24) 順に、陳鉄民『王維集校注』（中華書局、1997年）p.476・435・522。注(19) p.151。
- (25) 順に、注(24) p.594・179
- (26) 注(1)第IV章「ロマンティズムとリアリズムのせめぎあい」解説（萩野脩二執筆）
- (27) 注(19) p.283
- (28) 「支配階級」の原文は「統治階級」。注(18)『詞典』では「掌握国家政權的階級、有時特指占統治地位的剝削階級。」とする。
- (29) 注(3)「齊白石」（松村茂樹執筆）。傍点は川口。
- (30) 北京大学中文系文学専門化1955級集体編著『中国文学史（修訂本）一』「緒論」p.9（人民文学

出版社、1959年)

- (31) 本論文のあとに発表された戴世俊「有没有“中間作品”」(光明日報1959.12.27文学遺産293)は、注(30)の定義を「階級性、傾向性がない作品」と換言し、中間作品は存在しないとした。しかし王健秋「「中間作品」与階級性」(同1960.1.17文学遺産296)・蔡儀「所謂“中間作品”的問題」(同1960.1.24文学遺産297)・胡錫濤「略談“中間作品”及其它」(同1960.2.28文学遺産302)で、文学作品はすべて階級性を有するのであり、人民性と階級性とは別問題であるとして、相次いで批判される。中間作品論争はこのあとも『光明日報』紙上で続けられる。
- (32) 「贈孟浩然」「吾愛孟夫子、風流天下聞。紅顏棄軒冕、白首臥松雲。醉月頻中聖、迷花不事君。高山安可仰、從此挹清芬。」(詹鍔『李白全集校注彙集評』(百花文芸出版社、1996年) p.1254)
- (33) 注(32) p.897
- (34) 論では注(30)北大『文学史』と注(31)蔡儀論文を肯定しているが、中間作品という名称の曖昧さも指摘している。
- (35) 劉氏の論文はのちに劉氏の同名の論文集(上海古籍出版社、1979年)に再録される。その末尾には「1956年8月稿、1959年2月修改」とあるが、1959年に公表されたかは未詳である。
- (36) 南開大学の前身の学校の第一期生に周恩来がいる。注(3)「南開大学」(水谷尚子執筆)
- (37) 『中国文学家辞典現代第2分冊』(四川人民出版社、1982年)
- (38) 注(19) p.146。「八月湖水平、涵虚混太清。気蒸雲夢沢、波撼岳陽城。欲濟無舟楫、端居恥聖明。坐觀垂釣者、徒有羨魚情。」
- (39) 原文はそれぞれ「這首詩自然說不上有什麼思想性」、「象這種干謁的詩、自然說不上有多大可取的地方」。なお劉氏について劉著『宋詞小札』後記(広東人民出版社、1981年)には、劉氏は、1971年にまだ五七幹部学校にいたが、その時はすでに「獲得解放」で、行動は自由になっていたとある。つまり劉氏の幹校への下放は懲罰的な「労働改造」のためであったと考えられる。
- (40) 注(37)に同じ。
- (41) 譚優学「孟浩然行止考実 — 唐詩人行年考之一 — 」(西南師院学報1978-1)が1978年5月に発表される。
- (42) 注(3)「鄧拓」(土田真靖執筆)
- [附記1] 本稿で取り上げた⑤が『光明日報』に掲載されたのは1959年3月であるが、楊寬『歴史激流楊寬自伝』(高木智見訳、東京大学出版会、1995年) p.248には、学術論争が運動形式で進められるようになったのは郭沫若が同年1月25日同紙掲載の「蔡文姬の胡笳十八拍を談ず」で曹操の再評価を提起して以来のことである旨の記述がある。
- [附記2] 本稿の原稿提出後、その概要を山口中国学会2006年度大会(12.16)で発表する機会を得た。その席で大塚博久先生、阿部泰記先生、高木智見先生より貴重なご意見を賜わった。ここに記して謝意を表わす。ただ本稿ではそれらを十分に活かしていない。今後の課題としたい。

(中国文学)

新中国成立から文革発動までの孟浩然研究について — 『光明日報』掲載論文を中心に —

On studies of Meng Hao-ran during the time from the inception of the People's Republic of China to the beginning of the Cultural Revolution: A focus on articles reported in Guangming Ribao

Yoshiharu KAWAGUCHI

本稿所涉及の対象は自中華人民共和国成立至文化大革命開始の17年間中国大陸學術界關於孟浩然的研究。本稿將《光明日報》(1959-1966)所刊登的研究孟浩然的5篇論文作為研討重點；自1959.3至60.2《光明日報》刊登4篇，文革開始的1966.6刊登1篇。

1957至1960年，由於反右派鬭爭、大躍進、反右傾鬭爭的影響，在中国大陸文學藝術、學術研究的自由性、獨立性受到了嚴重的衝擊。《光明日報》也深受了共產風的影響。

1959.2《光明日報》刊登了1篇關於孟浩然的研究論文，此前已有4篇此類論文(54年1篇(《光明日報》刊登的)，57年3篇(其他報刊刊登的)。其中57年的1篇，本人未讀)。本人所讀到的3篇均論及文芸的人民性，它們把文學的藝術性、文學性作為討論的中心。

1959年至1960年《光明日報》刊登的4篇論文從現實主義、階級性、人民性、政治性等(所謂政治標準)方面對孟浩然和孟浩然的詩作——尤其是《春曉》——進行了爭論。這場爭論有兩種意見。一種意見是否定孟浩然及孟浩然詩歌的意義、價值。這種意見強調文芸的現實意義、人民性等而否定孟浩然及其作品。另一種意見則一方面指出孟浩然詩歌存在着階級性問題，一方面又肯定孟浩然詩歌的藝術價值。

1959年至1965年，《光明日報》之外的報刊上也有4篇關於孟浩然研究的論文發表。其中3篇論文既注意到文芸的政治標準，又充分肯定了孟浩然詩歌的藝術價值。另1篇論文是考証孟浩然生平事跡的，幾乎和政治標準無關。

1966.6.5文革開始之時，《光明日報》又刊登了1篇論文。作者是南京大學的學生，他曾下放到果園，有過和農民群眾共同生活的經歷。他本來喜愛孟浩然的《春曉》，但是這種生活經歷改變了他的想法，他認為《春曉》完全是封建文人思想感情的反映。他的論文完全否定《春曉》的意義及價值。當然孟浩然《春曉》的藝術性、文學性也被完全忽視了。

此後至1978年，研究孟浩然的論文便不見了。